

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
共同プロジェクト研究

2024年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局・職名		氏名					
	文学部・教授		浦野 聡					
研究課題	トルコ共和国アカルチャイ盆地 Dura Yeri 地区の古代・中世遺跡における古環境と遺構調査							
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2025年3月現在	所属研究機関・部局・職名		氏名					
	立教大学・文学部・教授		浦野 聡					
	立教大学・文学部・教授		深津 行徳					
	弘前大学・教育学部・教授		小岩 直人					
	慶應大学・文学部・准教授		長谷川 敬					
	立教大学・文学部・准教授		四日市 康博					
立教大学・文学部・教授		小澤 実						
全研究期間	2024年度		～	2025年度				
研究経費※	2024年度		2025年度		年度	総計		
(上段: 支出金額)	1,130,000	円	0,000,000	円	0,000,000	円	1,130,000	円
(下段: 採択金額)	1,130,000	円	1,130,000	円	0,000,000	円	2,260,000	円

※1円単位で記入

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

当該研究の研究目的を含むこと。

【以下、報告書全体について】他の研究分野の委員が評価することも想定し、わかりやすく記載すること。

本研究は、自然環境の変化と政治的・文化的条件の変動に、古代中世都市 Polybotos とその田園後背地、および同市をめぐるネットワークがいかなる社会的、経済的な影響を受け、変容を遂げていったのかを探ることを目的とした遺跡発掘予備調査である。予備調査という性格上、①2026年度以降に予定する本調査の発掘調査計画を策定し、発掘開始（トレンチ調査）適地点を決定すること、②複数の非破壊調査を併用して遺跡を巡る古環境（自然的・人為的）についての情報を獲得・精緻化することを目的とする。

将来得られるべき情報を永遠に失わせないためにも、先行類似発掘調査に学びながら、最新の遺跡調査法を駆使し、最小の介入で最大の情報を得るための慎重な発掘方針を策定することが必要となる。その点、本遺跡の北東隣（50km）で調査が進む Amorion 遺跡発掘は貴重な参照事例としよう。イギリス・ギリシア・トルコ国際協力隊によって40年も前に開始されながら、遺跡全体の10分の1程度を発掘したに留まるこのプロジェクトは、調査範囲を農村後背地まで拡張、5巻の発掘中間報告書と100篇以上の研究論文を発表した後も、なお、成果をもたらし続けており、研究の蓄積の浅い中世考古学 研究の貴重な模範事例のひとつとなっている。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

〔都市遺跡〕 〔流通ネットワーク〕 〔古環境〕

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもちて研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。
- ・どのような点において、当該研究分野の学術研究推進の高度化に寄与できたのか。

2024年度、本研究は、4月から7月の事前準備、9月から11月の事後分析、12月の中間成果論文発表を除けば、(1)8月における現地表面調査、および(2)10月における現地磁気探査(イスタンブル工科大学アハメット・ユクセル博士と、博士が代表者を務めるルメリ・ゼミン社への調査委託。調査実施監督は、研究協力者のディジュレ大学イスマイル・ペイタク助教に委託)を主たる二つの調査として遂行した。当初計画においては、都市遺跡周辺の旧河道網を中心とする古環境復元も、GIS(地理情報システム)データ分析とボーリング調査によって行う計画であったが、GISデータ分析は現地表面調査に先立つ事前準備に十分活用しえた一方、ボーリング調査については、後述の理由により、実施困難として延期した。

本研究は、(1)現地表面調査の知見に基づき(2)磁気探査を行い、発掘予定地候補を定めることを本年度の研究主目的とし、実際、調査はそのような手順で行われたが、具体的調査手順の詳細を述べる前にあらかじめ対象フィールドの定義変更について述べておく必要がある。すなわち、本研究は、申請時には、調査対象地区は150haに及ぶ広大な地域で、この全域をドウラ・イェリ地区として認識していた。この理解は、特に現地文化行政機関が、この150haを「ドウラ・イェリ史跡保護地区」として認定していたことに基づく。ところが、情報収集が進むにつれ、この区域名は、広義の便宜的呼称であり、狭義のドウラ・イェリ地区は、ボルヴァディン町の西方3kmの75haを指すこと、残余の75ha、すなわち、この狭義のドウラ・イェリ地区と農道を隔てて西に隣接する地区はハジュ・ムラト地区と呼ばれるべきことが、現地住民への聞き取り調査やその調査を行ったウチホック発掘隊(研究協力者オズデミル・コチャク教授が代表)からの情報によって判明した。実際、ドウラ・イェリとハジュ・ムラトは本研究チームがDEM(デジタル標高モデル)データに基づく傾斜分布から、もともと古代において単一の都市計画によって成立した一つの広大な都市の遺跡として、隣接・連続しながらも、遺跡としての性格が異なる。すなわち、前者では、12世紀初頭にこの都市が最終的に放棄された際の中期ビザンツ帝国時代、テマ・アナトリコン行政管区の首府としての遺構が、それらの形状を衛星写真で認識できる形で、地表を全面的に覆い尽くしているのに対し、後者では、地表面にその平面プランを明確に認識しうるような人工建造物の痕跡は、後述の劇場跡、および聖域跡と思われるそれらの他は、見出しがたいのである。このことから、両者の区別は妥当な区分であると考えられ、以後、これらの呼称を採用して、両地区を区別することとした。

まず(1)の現地表面調査は2024年8月2日から20日まで行った。調査開始に先立ち、2003年、ハジュ・ムラト地区の北部区域において、東西を貫く現代のボルヴァディン—チョバンラル間道路の付け替え工事が行われた際、後期青銅器時代の墓域が3mの深さから偶然発見され、3基のピトス墓の緊急発掘がなされていたとの情報を得た。早速、当時の発掘責任者で現アフィオン文化観光局長のメブリュト・ウユメズ氏同道のもと、この墓域の実地調査を行った後、衛星画像とGISデータの分析によってその位置を特定したところ、自然地理上、北側の、比較的なだらかなパシャダー丘陵から幾筋も伸びる涸れ川(ワディ)のうち、最長のものが形成する最大の扇状地の扇中央部上端に位置することを確認しえた。すなわち、この道路の付け替え工事は、扇状地形による国道のアップダウン解消のため行われたものだが、そのため3mもの深さを掘り下げる必要があったというほど、この扇状地はほぼ水平な沖積平野上に位置する遺跡全体の中で際立つ高みを持っている一方、この扇状地は、ドウラ・イェリとハジュ・ムラトの両地区を合わせた都市遺跡全体の中央部に位置しているというように、都市集落、また都市集落形成以前の青銅器時代にも集落景観上の焦点たりうる要地であったと考えられよう。さらに、この扇状地に注目すれば、扇端部のちょうど中間地点に、おそらく人工の、直径50mの半円形のすり鉢状の建造物の痕跡が存在していること、また、そこから南南東に幅90m、長さ120mにおよぶ矩形の範囲に、南端部で1~2m程度の高さを呈す、おそらく人工の盛り土があったことも確認しうる。この扇状地に対する人為的地形改変と矩形外延部付設の痕跡、その土木工事規模の大きさ、都市遺跡全体の中での中心的位置、青銅器時代の墓域遺構との想定される関連から、ここに、都市遺跡の中でも、特に古い歴史を持ち、重要な位置を占める遺構群が存在したものと期待できよう。そのような考察に基づき、表面調査はこの地区を含む、幅300m、長さ200mの範囲で集中的に行うこととした。

表面調査においては、この範囲について、50m×50mをひと区画とし、計24区画の表面採取を実行した。その結果、少なくとも鉄器時代(前8世紀から前2世紀)に遡るとみられる灰陶、ヘレニズム時代(前4世紀から前

研究【経過・成果】の概要(つづき)

1世紀)に遡る黒陶、ローマ時代の精製土器であるレッド・スリップが、いずれもさほど数多くはないものの採取された一方、古代末期(4世紀から6世紀)の実用雑器(比較的品質の高いものから低い粗製土器まで)が多数発見された(2019年のコチャク教授の報告によれば違法盗掘跡から、青銅器時代の土器も発見されたという)。また、ビザンツ中期の彩釉陶器も2点発見された(ビザンツ期(7世紀から12世紀)の粗製土器については、指標土器が存在せず、特定することを得なかった。特に、多数発見された古代末期の雑器と区別できなかつた可能性は否定できない)。これらの採取資料は、各時代の地層的コンテクストの中で発見されたわけではなく、原位置を失っているため、この調査区域に上記の各時代の遺跡が眠っているとは確言しえない。とはいえ特に、周囲より標高の高い矩形外延部からは、土器片のほかに、おそらく古代末期に属すると思われる大理石製の祭器の底部、ENと刻まれた部分のみが残った碑文小片(Eの半月型字形から2~5世紀に属する可能性が高い)が発見されており、ここにキリスト教関係の施設、おそらく教会があった可能性がある。さらに、矩形区域の盛り土形状、また、この区域の、都市全体の中での中心的位置を考慮すれば、ここにはキリスト教教会以前に、古代の聖域(テメノス)があり、そこに神殿等が建っていたという可能性も考えられよう。また、そのすぐ北側に存在する半円形のすり鉢状構造は、その南側に東西方向の弦を持っており、それが人工物ならば、小アジア=アナトリアの古代都市の類例から、この都市が位置するアカルチャイ川形成平原の沃野の眺望を背景とする劇場、ないしオデオンであった可能性が高い。かくして、かつてこの扇状地上に展開した街区は、その位置の中心性と青銅器時代の墓域-劇場-古代と古代末期の聖域という北から南に連なる宗教的重要施設の直線的配置がそのうえに展開されており、この地区が放棄されるまで、都市の宗教的・政治的中心として機能していたものと考えられてよいだろう。なお、この地区は、都市領域の南端まで達しており、そこから2m程度の段差が、アカルチャイ川の沖積平野、ないし、アカルチャイ川の旧河道に向かって、おそらく人為的に形成されていたであろうことも推測される。

以上のような推定の下、(2)の磁気探査を、上記300m×200mの範囲のうち、とりわけ、将来の発掘にとって有望と思われる個所、すなわち、a)扇状地の矩形外延部先端付近の100m×100mの範囲、および、b)半円形のくぼみを中心とした75m×75mの範囲で行った。この探査法は、探査範囲に1m×1mのグリッドを設け、各グリッドの隅において計測した磁気異常分布を以て地中構造物の存在を探るものであるが、その結果、a)の範囲では、まさしく劇場の座席(Cavea)に当たる部分の扇形の基礎構造体と、扇形の弦の部分に背景建物(Skene)の基礎構造体の痕跡を発見し、また、b)の範囲では、東西に軸線を持つ建物基礎の痕跡を北側に、南北に軸線を持つ建物基礎の痕跡を東南部に認めた。b)区域における二つの建物の性格については、実際、発掘してみるまで特定しえないが、東西の軸線を持つ建築物は、通例、同じ軸線を持つ教会建築の可能性があり(しかし、教会建築の場合に往々にして認められる東側のドーム部は確認できなかった)、南北の軸線を持つ建築物は、キリスト教化時代(4世紀~)より、もっと時代を遡る、ギリシア・ローマ的伝統宗教の神殿等の建築物であった可能性がある。我々は、26年度以降の本発掘に向けて、25年度に最初にトレンチを開く箇所を、古代聖域と古代末期教会がおかれたと見積もられるこのa)区画に定めることとする。

なお、もし、これらの基礎構造が実際、ここで想定されたような、あるいはそれに類する建築物のものであったのなら、この沖積平野における過去3000年の堆積の緩やかさから考えて(おそらく堆積土は最大3m程度)、上部構造は、ドゥラ・イエリ地区の、中期ビザンツ期の建築物の数々や、あるいはその後、セルジュクトルコによって建設された現代のボルヴァディン町、アフィオン市の建築物のために、スポリア材として持ち去られている可能性が高いが、むしろ、そのような状況は、今後の発掘で、重量のある、移動に重機が必要な建築部材の発掘・移動・保管等を考慮することなく、比較的広い範囲に発掘を拡張、古代から中世に至る都市の変遷をたどるのに好都合であるといえよう。

最後に、都市遺跡周辺の旧河道網を中心とする古環境復元をボーリング調査によって行う計画が未達に終わった件であるが、旧河道網は、ドゥラ・イエリ史跡保存地区外の、私有地・町有地に存在したと考えられ、現在、農地として使用されているこれらの土地にボーリングマシンを入れて試料採取を行うことが困難であると判明した。また、史跡保存区域内では、ボーリング調査は可能としても、史跡地区にむやみにボーリングの穴をあけるわけにはいかず、まずは、建築物の発掘を行い、建築物の不在を確かめられた区域で、かつ標高の低い、旧河道、ないし運河が入り込んできている区域でボーリング調査を行うことが、妥当手順であるとの結論に達した。

※この(様式2)に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

Urano, S., N. Koiwa, Y. Fukatsu, T. Hasegawa, I. Baytak and Ö. Koçak, "Two Approaches in a Preliminary Archaeological Survey of Polybotos (Dura Yeri - Hacı Murat) prior to the Excavation", 『史苑』 *Shien (The Journal of Historical Studies, Rikkyo University)*, 85-1, 2025 January, pp.221-246